

台湾の特色のある相声を探し求めて（前編）

戸張東夫（元産能大学教授）

わが国の落語、漫才によく似た中国の、笑いの伝統話芸シアンション相声をファンとして長年親しんできた。中国語のきれいな音が楽しめるうえ、話自体も面白い。ここ数年は台湾の相声にすっかりハマっている。十数年前台湾で買い求めた録音テープを改めて聴いたのがきっかけだった。中国と台湾は政治制度も、社会状況も異なるだけでなく、長い間交流が途絶えていた。だから中国相声とは一味ちがう、台湾色の強い「もうひとつの相声」を聴くことができるかもしれない。そんな期待もないわけではなかった。

録音テープのケースカバーに ウェイロンハオ魏龍豪、ウウチャオナン呉兆南

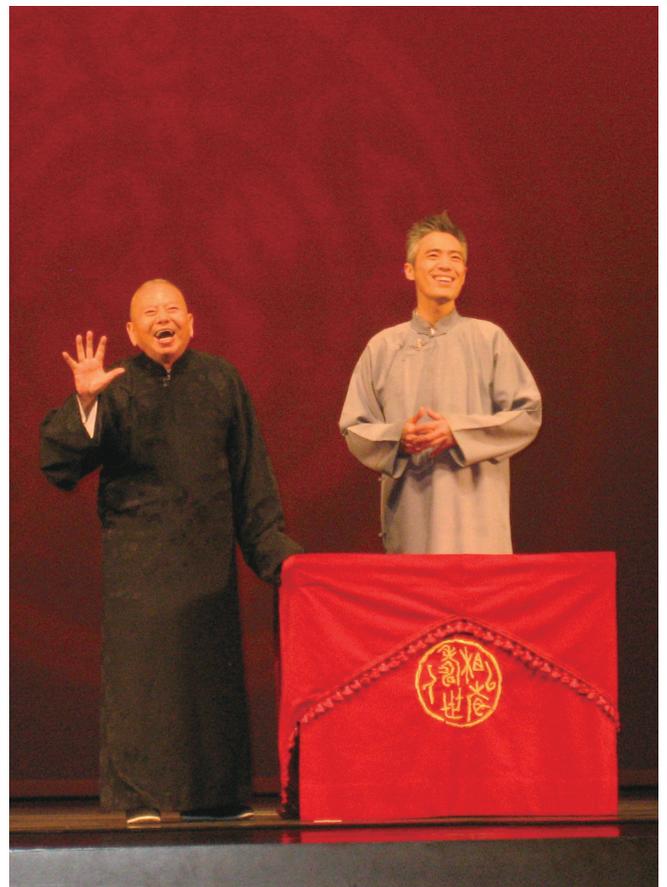
の名が印刷してある。調べてみるとこの二人は台湾で一、二を争う名人クラスの相声芸人だという。魏は1999年七十一歳で他界したが、呉は八十八歳の高齢ながらいま（2014年）も舞台に立っているという。

写真を見る機会があったが、マユの濃い目鼻立ちのはっきりした、いかにも芸人らしいいいカオをしている。こんな人物なら舞台も見たいし、出来ればお会いして話してみたい。

台湾の友人にそんな話をしたところ半年も経たないうちに何から何まですべてお膳立てをしてくれた。こうして昨年（2013年）10月台中で呉さん



米ロサンゼルス自邸でくつろぐ呉兆南氏（2014年1月）



台中公演で観客の拍手に応える呉兆南氏（左）（2013年10月）

と弟子たちの公演をライブで楽しむことが出来たばかりか、今年（2014年）1月米ロサンゼルス^{ロサンゼルス}の自邸で呉さんにお会いし、相声が台湾にやってきた当時の様子など詳しく伺うことが出来た。大きな収穫であった。これらを踏まえ台湾の相声についていささか紹介してみたい。

まず中国相声を語ろう

台湾にはもともと相声はなかった。中国本土から伝えられたものだ。伝えられた相声は、台湾で中国とは異なる道を歩んできた。その結果台湾独自の、台湾の特色のある相声を作り上げたのかどうか。その辺を考察するのがこのエッセーの目的である。したがって直ちに台湾の相声に取り組みたいところである。ところが考えてみると中国相声そのものがわが国ではあまり知られていない。まず中国の相声をご理解いただいてから、台湾の話に移っても遅くはないであろう。多少道草を食うことになるがご容赦願いたい。

相声は清朝末期、第九代皇帝・咸豊帝在位の時期（1850～1861）到北京、天津一帯の中国東北部で発達し、広まった。いまから約百六十年前のことである。

わが国の笑いの話芸の歴史と比べてみると、落語は、江戸時代の趣味人の僧安楽庵策伝が笑い話集『醒睡笑』をまとめた元和9年（1623年）前後を起源とすればざっと四百年の歴史を誇る代表的な話芸である。また漫才は、それまで奉祝芸だった「万歳」をいまのような対話中心の「しゃべくり漫才」に改革した大阪・吉本興業のエンタツ・アチャコ（横山エンタツ、花菱アチャコ）がコンビを組んだ昭和6年（1931年）をいちおう出発点と考えると、約八十年の歳月を歩んできたことになる。相声は落語と漫才の間の時期に登場したものだ。

相声はこれだけの歳月を経た話芸なので、中国共産党が中華人民共和国を発足させた1949年にはすでに話芸として基本的に完成していたと考えてよいであろう。このように共和国成立前に作られたり、語られたりした相声は全て伝統相声、つ

まり古典相声、共和国成立後作られたものを新作相声として区別するようになった。

伝統相声は専制王朝の時代に生まれた話芸だから、時代の影響から逃れられず、封建的な考え方に染まっている。権力者や金持ちをわけもなく尊んだり、女性や労働者、農民を蔑視したり、また貧乏人や身障者をあざ笑ったりする作品が少なかつた。このため中国当局は一部の伝統相声を改作して上演を許したものの、伝統相声を敵視する傾向が強かった。芸人たちも伝統相声を避けるようになり、結果として伝統相声は公にはあまり語られなくなってしまった。残念なことである。一方新作相声は数多く作られたが、当局が厳しく管理、統制しているため本来の面白さを十分に発揮できないのが実情である。これもまたファンにとって残念なことである。

相声は漫才？それとも落語？

では相声はどのような話芸なのであろう。一口に相声といっても演じる芸人の数によって三つの形式に分類される。一人だと単口相声^{タンコウ}、二人であれば対口相声^{トイコウ}、また三人かそれ以上なら群口相声^{チュンコウ}とよばれる。いずれも舞台に立ったままの姿勢で話を展開する。相声の内容はともかく、見た目ではわが国の類似の大衆演芸を挙げてみると単口は漫談、対口は二人が掛け合いで語るのだから漫才、群口は最近流行のコントということになるだろうか。

こうしてみると相声は漫談、漫才、コントを総合した話芸ということになるかもしれない。だが実際に聴いてみると芸人の数にかかわらずどれも落語の味わいなのである。試みにここで相声の特徴を以下に列挙してみよう。

まず第一にストーリー性が極めて強いことだ。笑いの話芸だからギャグやアドリブが飛び出すことは言うまでもない。だが、どんなときでも最初があって終わりがある、終始一貫した、起承転結のある物語をかたるのが原則である。

同一作品・台本を複数の異なる芸人が語ることが多い。とくに伝統相声にこれが目立つ。これが第二の特徴である。

また師匠から弟子へ、弟子からまたその弟子へというぐあいに芸や相声を伝承していく慣習が守られている。これが第三の特徴である。

四つ目の特徴は、長い歳月をかけて大勢の芸人が語り継ぎ、練り上げた話芸だけに、「マクラ」、「主題」、「オチ」など規範となる形や、守るべき慣習が出来あがっている。

最後は、相声を読んで楽しむのが一般的通念になっていることだ。有名な相声芸人であれば、自分の持ちネタをまとめ、自分の名前を頭につけた相声集を一冊か二冊は必ず出版しているといっているくらいである。

相声のこれらの特徴はすべて日本の落語に当てはまるものである。とくに古典落語には全て完全に当てはまる特徴である。漫才とはまったく別種の話芸というべきであろう。なぜわざわざ相声が漫才ではないことを強調するのか。これには理由がある。わが国で発行された各種の中国語字典や中日辞典を見ると、その多くが「相声」の訳語を「漫才」とか「中国漫才」としている。そればかりか中国の研究者の中にも「相声」を「漫才」と訳してはばからないものもある。いい機会なので改めて指摘しておきたいのである。

伝統相声小段「カネを拾う」

相声の短いものを小段シアフトアンという。本題に入る前のマクラや、アンコールにこたえて話す小ばなしなどに使う。この小段だけを一冊にまとめた『中国伝統相声小段匯集』が手許においてある。2002年に北京の文化藝術出版社が出版したものだ。ここからひとつ拾い出し以下に訳出してみよう。タイトルは「チェンチェン 撿錢（カネを拾う）」、対口相声である。説明は要るまい。説明しなければならぬのなら相声とはいえない。

甲 性格というものはひとによって皆違う。好みもひとそれぞれだ。

乙 十人十色、それぞれ好みも違うな！

甲 だが度を過ぎるのは傍迷惑だ。

乙 違うない。

甲 講談が好きなもの、芝居が好きなもの、酒が好きなもの、どれもとかく度を過ぎしかねない。度のすぎたケチもいる。

乙 度のすぎたケチ？

甲 こういう手合いは四六時中金儲けのことしか考えない。外に出ると小銭でも落ちていないかなどといつも考えている。

乙 そんなのが本当にいるのかね！

甲 我が家の近くに二人の兄弟が住んでいる。この二人道を歩いているうちに雑談をはじめた。

乙 どんな？

甲 兄が弟にこんなことを言った。「きょう千元拾えたらいいんだがな。拾ったらお前に三百元遣る。おれは七百元で我慢する。」すると弟がこうだ。「兄貴はどんな権利があって七百元取るんだ！兄弟じゃないか折半でどうだ？おれにも五百元よこせよ。」

乙 そんなことで言い争いか？

甲 「お前もわからないヤツだな。おれが拾ったカネだ。三百元遣れば文句あるまい。そう欲張るものじゃあない」兄がこういうと、弟は「おれと一緒にいなくても拾ったカネは分けるべきだよ！」と譲らない。

乙 ついに喧嘩か！

甲 「そんなこと言うならお前にはビター一文遣らない！」「何を言う。よこさなければ腕ずくだ！」「やる気か！」バシッ！一方が相手の横っ面をひっぱたくと、叩かれた方も負けずに相手の髪の毛につかみかかる。

乙 喧嘩するようなことかね？

甲 二人でなんと一時間も揉みあっていると巡査がやってきた。「手を離せ！どういふことなんだ？」兄がこたえた。「私が一千元拾ったので弟に三百元遣るといったんです。しかし五百元くれとってどうしても聴かないんです。みて下さい！弟にかじられて耳たぶが半分千切れちゃいましたよ！」すると巡査が聞いた。「それでそのカネはどこだ？」「カネ？まだ拾ってなかつ

た！」

乙 確かに。度を越したケチだ！

これが相声である。紙幅の都合で一編だけしか紹介できないが、相声がどんなものか多少お分かりいただけたのではなからうか。

そこで早速台湾の相声に話題を移したい。

この中国相声が予想もしなかった時期に、予想もしなかった形で台湾に渡り、さらにまた予想もしなかった人たちによって語り継がれ、そのことが台湾の相声のひとつの特徴ともなったのである。

相声が1949年台湾にやってきた

相声が台湾に渡ったのは1949年であった。

これは意外であった。もっと早い時期に台湾に伝わっていたかと思っていたからだ。しかし中国の歴史を振り返ってみれば、最後の専制王朝である清朝が1911年の辛亥革命で崩壊、翌1912年孫文らによる中華民国が発足したとはいえ、1949年に中華人民共和国がスタートするまで中国国内は混乱続きだったのである。また台湾はといえば、1895年に日本に割譲されて以来1945年まで50年のあいだ日本の植民地だった。誰にしても相声どころではなかったのである。

それにしても1949年は中国にとってきわめて重大な歴史的時期であった。中国の支配権をめぐる中国共産党の人民解放軍と国民党軍による内戦は、人民解放軍の圧倒的優位のうちに最終局面を迎えていた。いち早く天津、北京を落とし、華北を制した人民解放軍は揚子江を渡り全面攻撃に移った。各地で孤立した国民党軍では全滅したり、戦わずして投降したり、共産党側に寝返ったりする部隊が続出、もはや壊滅状態だった。この年10月共産党は北京に中華人民共和国を樹立した。国民党のリーダー蒋介石もついに敗北を認め12月飛行機で台湾に脱出した。中華人民共和国と台湾の中華民国の二つの中国はこのとき以来存続している。

この時期を通じ戦火を逃れたり、国民党を支持

するひとたちが大勢台湾に逃れてきた。軍人、その家族、公務員、教員らおよそ200万人が難民として台湾にやってきたといわれる。このうち60万人は軍関係者だったという。この難民たちとその子弟を「外省人」と呼び、それ以前からの台湾住民「本省人」と区別したことはよく知られている。「外省人」にしても「本省人」にしても民族的には中国から来た漢人である。民族的な違いがあるわけではない。ただ「本省人」は当時中国語を理解せず、おもに台湾語を使っていた。また「本省人」は日本植民地時代を経ただけに日本語のわかるものが少なくなかった。

中国の相声芸人がこれらの難民とともにやって来て台湾に相声を広めたのであろうか。いやそうではない。相声芸人がやってきたという記録はまったくないのである。

筆者は以前台湾映画について研究したことがある。そのとき中国の多少名のある映画人で1949年前後に国民党軍とともに台湾に脱出してきたものが一人もいなかった事実を知った。国民党軍の文化政策が失敗したためだと言われていた。相声芸人についても同じことが言えるかも知れない。もっとも当時の相声芸人の貧乏暮らしから推測するに、たとえ望んだとしてもカネもコネもないため台湾に脱出しようがなかったというのが事実に近いのではなからうか。

それでは誰が相声を台湾につたえたのか。

60万といわれる国民党軍だった。もっと正確に言えば国民党軍所属の演芸隊であった。

「相声のような民間芸術は台湾では歴史はそれほど古くない。1949年、1950年以前にあったという資料も記録も私は見たことがない。今後の研究でもっとはっきりするかもしれない。1949年から50年にかけて国軍(国民党軍)の大部隊が台湾にやってきたが、『相声』の公演がこのときから始まったことは間違いない。というのは当時師団級以上の部隊には、将兵慰問の演芸隊が作られており、多くても二、三人で演じる相声のような伝統的な大衆芸能は部隊内で引っ張りだこだった。京劇、現代劇、越劇(浙江省の地方劇)、豫劇(河

南省の地方劇) などしばしば上演されていた。」元相声芸人の張國棟はこう証言する。

軍が育てた台湾の相声

台湾ではこうして国民党軍の演芸隊が相声を語り継ぐことになったのである。演芸隊は台湾各地に展開する各部隊を訪れて慰問公演をするほか、軍内の演芸大会やコンクールに出演するなどもっぱら軍内で活動していた。

1950年朝鮮戦争が勃発、このため米軍部隊が国共内戦に介入して中国の台湾進攻を阻止したことから台湾もようやくかつての落ち着きを取り戻した。51年夏のことだが、わずか一か月前後の短い期間に「楽園書場」、「蓮園夜花園」、「紅樓」など台湾の主要書場(演芸場)が五つもオープンした。これは台湾の人たちが平和の到来を待ちかねて娯楽を求め始めていたことを間接的に物語るものといっておかろう。演芸隊の隊員たちも台湾社会に活動の場を求めて軍を離れ、ラジオや舞台で芸人として生きていくものが少なくなかった。もちろん生活のためであった。

当時人気のあった相声芸人として魏龍豪、陳逸安、丁長華、胡覺海、張復生、謝君儀、馬元亮らの名前を挙げる事が出来るが、いずれも軍出身の芸人だった。台湾の相声芸人になぜ元軍人や軍関係者が多いのかと筆者はかねて疑問に思っていたが、これには台湾相声界の特殊事情があったのである。これも台湾の相声の特色のひとつといえるべきかも知れない。

それはともかく相声芸人といっても軍の演芸隊出身だからアマチュアである。プロの芸人は一人もいなかったという。相声芸人として生きていくとなると現実は厳しかったに違いない。中国にいた当時相声を見たことがある、聴いたことがあるという記憶を頼りに覚えているわずかな数の相声を繰り返し語ったり、細切れのセリフを寄せ集めて語ったりしながら自己流の相声で押し通すほか道はなかったのである。それでも何とかやっていたのは娯楽の少ない当時の観衆が喜んでくれたからであった。

昨年10月台湾で会った現地の相声芸人たちは、台湾の相声の現状を自嘲的に反省とも、批判とも受け取れる口調で批判し、欠点を数え上げた。中国と比べレベルが低い、正式に相声を学んだ芸人がひとりもない、相声に真剣に取り組むものがない、長続きしない、若い世代を育てることが出来ない、台本をまとめる人材がない、観客層を広げることができないなどである。だがこれは相声と軍の結びつきがもたらしたもので、いわば台湾の相声の宿命というほかない。

台湾の相声は「まいたタネ、ではなく、「こぼれ落ちたタネ、だった。台湾の片隅にこぼれ落ちたタネは日当たりも悪く条件の悪い場所で、世話をしてくれるものもなく、誰からも期待されることなく自分の力で何とかここまで生きながらえてきた。それだけでも並大抵のことではなかったに違いない。

相声と台湾語

中国東北地方の話芸である相声が中国南部福建省の対岸に位置する台湾に来たからにはことば(言語)の壁にぶつかることはいわば宿命である。相声とことばの問題にも触れておくべきであろう。

相声はもともと中国東北地方で発達したもののだけに、はじめは東北地方の方言で語られた。現代に入って^{フウトンホア}普通話とよばれる標準語が制定されると、これを使うようになった。標準語といっても中国東北地方の方言を基にしたものである。中国各地には方言が多い。各地の方言による相声も奨励されている。だが相声はやはり普通話で語ることが圧倒的に多い。相声といえ普通話で語るのがいまや通念になっている。

ところが相声がやって来た当時の台湾では、人々(本省人)は台湾語と、日本の植民地時代に強制的に学ばされた日本語しか知らなかった。中国語はわからなかったのである。このため中国から新たにやってきた「外省人」とは意思の疎通もうまくいかなかったという。これでは相声の入りこむ余地はない。

「日本の植民地だった頃中国から台湾に京劇が伝えられた。中国語で演じる中国の伝統劇だったが台湾人ファンも少なくなかった。こういう人たちは相声を理解できたに違いない」という相声界の人もある。だが当時京劇を楽しむことが出来る台湾人はごく一部の裕福な人たちだけだったに違いない。当初相声を楽しんで笑うことが出来たのはやはり「外省人」に限られていたのではあるまいか。

このような状況を大きく変えたのは国民党政府が、台湾人に対する日本の影響を消し去る狙いもあって積極的に推進した中国語普及政策だった。

政府当局は1945年の日本敗戦によって中国に復帰した台湾を接収した直後、いち早く台湾省国語（中国語）推進委員会を設置、次いで1951年7月「各レベルの学校の教育は全て中国語で行う。台湾語の使用は禁止する。教員採用に当たっても中国語の能力を考慮すべし。」という行政命令を発した。この中国語普及政策で台湾の若い世代の中国語能力は急上昇した。「はじめのうちは相声

を聴いてもことばがわからないので興味がわかかなかった。上流階級の人たちの楽しむものだと思った。でも学校で学んで中国語がわかるようになると内容も面白いので聴くようになった。」台湾政府機関で働く筆者の知人の本省人はこう証言する。

この中国語普及政策は、裏を返せば「台湾語を禁止する」ことだから、台湾の人たちの中には、中国語や相声のような中国語の話芸に反感を抱いているものがあるのではないかと筆者はかねて懸念を抱いていた。だが今回はそういう声を聴かなかった。運がよかったのかも知れない。相声に反感を抱くどころか、相声を聴いて中国語を学んだものも少なくないという。

こうしてこの中国語普及政策は相声が台湾社会に広く受け入れられるための大いなる追い風になったのである。この普及政策がなかったら相声はたぶん「外省人の相声」のままとっくの昔に忘れられてしまったに違いない。 （後編へ続く）

（※写真はいずれも筆者提供）